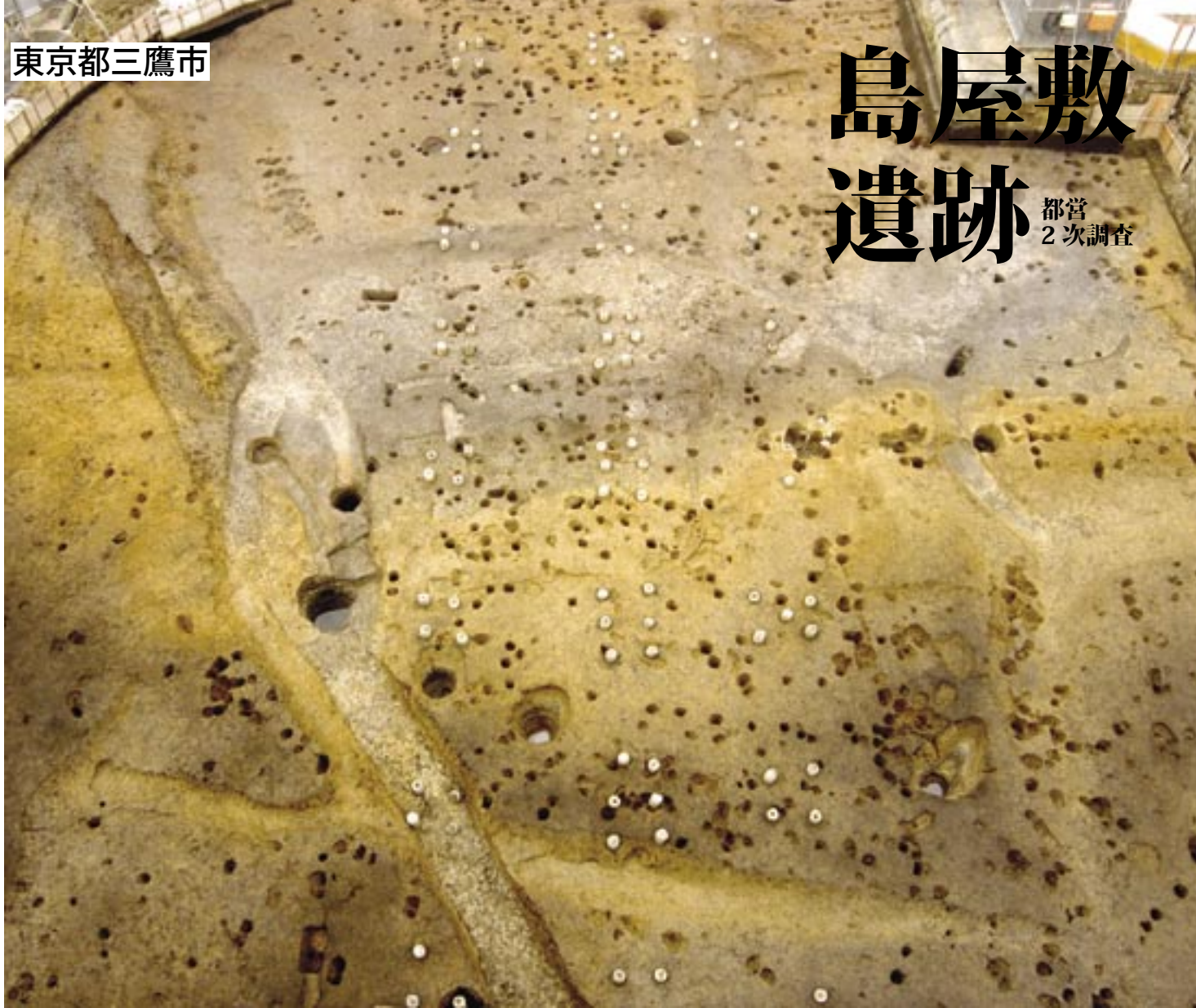


島屋敷遺跡

都営
2次調査



調査区全景

はじめに

島屋敷遺跡は三鷹市新川に位置し、低地に浮かぶ島状の台地を中心としたその範囲は 138,100 m²に及びます。当遺跡については『新編武蔵風土記稿』に、中世武士団である金子氏の屋敷があったとの伝承と、17世紀初頭に旗本柴田氏が陣屋を構えたという記載があります。その後、元禄 11 年（1698 年）柴田氏の三河転封に伴い陣屋は廃され、以後、徳川氏の直轄領となったようです。

発掘調査は、平成 4 年以来、三鷹市遺跡調査会と東京都埋蔵文化財センターによって実施されており、上記の伝承を裏付ける中世集落や旗本陣屋の存在が確認されています。また、旧石器・縄文時代の遺物や古代の住居跡、近代の津村薬草園の遺構等も発見されています。

今次調査は都営住宅新川団地の建替工事に伴う一連の調査の一つで、陣屋跡のあった島上台地から見て北西に広がる低地に位置する約 1,528 m²の調査区を平成 14 年 9 月から平成 15 年 3 月まで発掘調査しました。その結果、水捌けの悪い場所であるにも関わらず、多数の建物跡や溝、生活遺物等を発見しています。以下、その結果の概略をご紹介します。



板碑出土状態

中・近世の遺構と変遷

都営地区に存在する多数の遺構は、13世紀から19世紀初頭にかけてに造られたと考えられます。このうち、今次調査区で得られた成果の一つは、検出した多くの溝の時期的変遷を、ある程度明らかにし得たことです。それに伴い、土地利用の移り変わりも明らかになりました。

調査区内は湧水点を起点とする緩い谷状地形になっていて、排水が行われる前は湿地帯のような景観だった可能性があります。このため、14～16世紀代に属する3条の溝は、同時期に存在したと考えられる掘立柱建物群の敷地を区画することと同時に、調査区南西部にある湧水点から湧き出る水を処理しつつ、農業用水として利用するために掘られています。また、それぞれの居住区画には井戸が掘られ、一部には屋敷墓に伴う施設の可能性がある地下式坑も設けられていました。

なぜ、中世の人々が条件の悪い土地に建物を建てたのかというと、大規模な灌漑用水が無かった当時、水の乏しい武蔵野台地では農業用水を雨水や湧水に頼らざるを得なかったからです。この貴重な水源を確保するため、彼らは敢えてこの低地部に住んだのです。

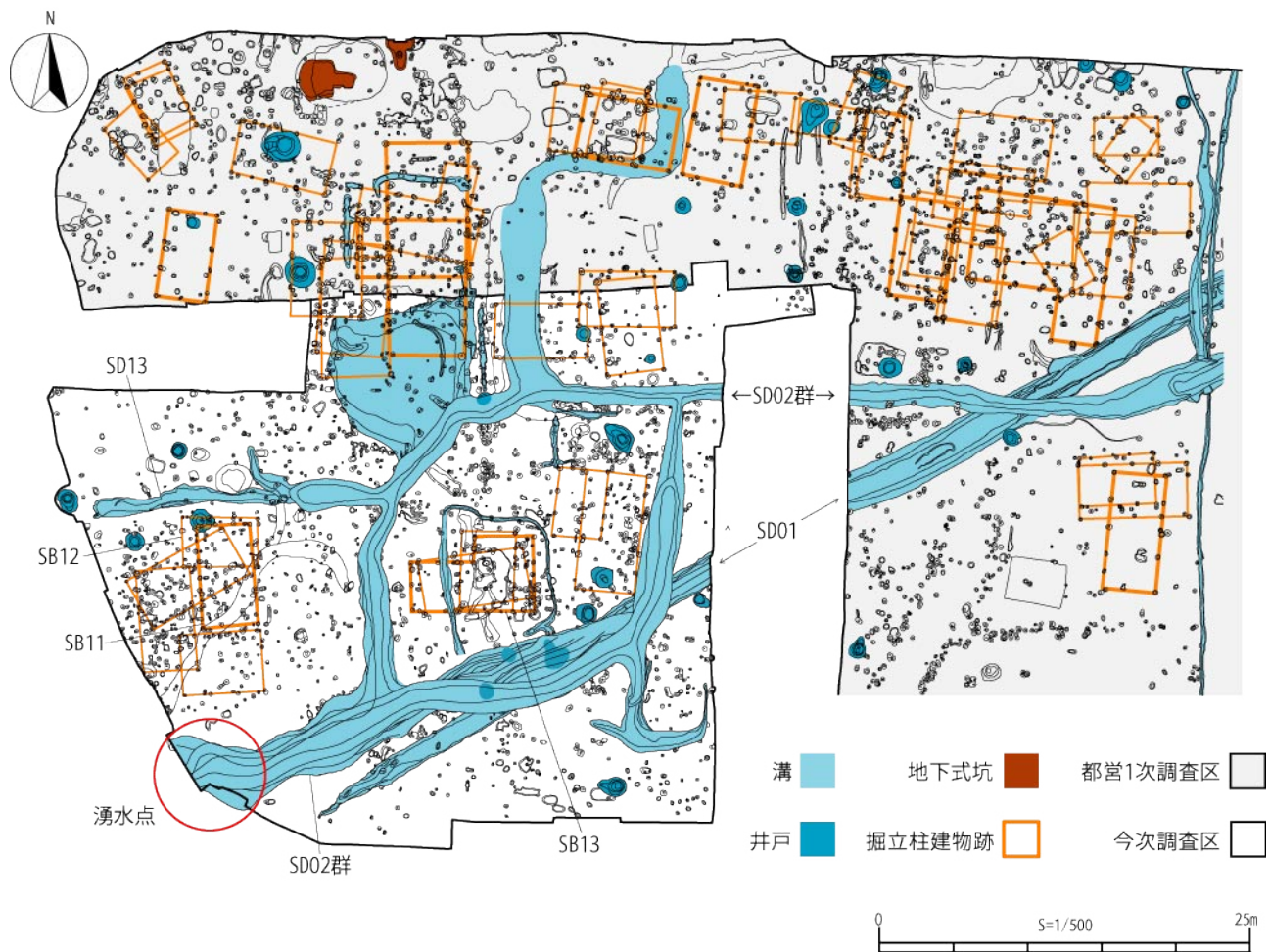
しかし、当時の掘立柱建物では、土中の水が多いと地面に埋めた柱がすぐに腐ってしまいます。そこで水に強い材料を柱に使うことが多かったようです。掘立柱建物跡 SB12には水に強いクリが使われていました。また、SB11と13の名称

を付けた両掘立柱建物跡には、近在で容易に調達できるエゴノキ属が使われています。エゴノキ属を建物の主要となる柱に使っていた発掘例は無く、また民俗事例でもあまり類例がありませんが、すぐ劣化してしまう建物を維持管理するためには、素早い資材調達が必要だったのでしょう。

さて、溝は16世紀末から17世紀末にかけて、掘り直しを繰り返しながら使われ続けます。区画する範囲も前代のものが踏襲されていますが、掘り直された新しい溝からは廃棄された大量の遺物を発見できるので、常時維持管理されていた訳ではなさそうです。これらの溝の西側では同時代の畝の跡も見つかっており、かつ、溝内出土遺物群の位置が西に偏っていることから、畝を耕す際に掘り出した前代の遺物をゴミとして溝内に投棄したと推定できます。この時期、掘立柱建物群は既に廃絶して周囲は農地化していたのでしょう。また、この時代には湧水の量が減りつつあったようで、幾つかの井戸はこの時期に農業用水用として掘られたようです。

18世紀に入ると調査区付近にまで玉川上水の水が引けるようになったため、調査区内は大量の客土によって嵩上げされ、全域が水田に改良されています。この時、水が枯れ始めていた湧水点は埋め潰されて、土地の区画も前代のものとは別の、全く新しいものになりました。

さらに18世紀後半から19世紀始めにかけて、改めて水田が造り直され、その区画が現在の道路や敷地といった地割りの原型になったものと考えられます。





中・近世の遺物（左側3列が中世遺物、右側が近世遺物）

中・近世の遺物

今次調査では、13世紀から19世紀初頭にかけての遺物が出土しています。中心は15世紀代と17世紀代ですが、15世紀代の遺物がやや多いことに特徴があります。

14～16世紀にかけての中世の遺物は瀬戸・美濃や常滑産の陶器が主体ですが、他に南伊勢産の羽釜や在産の香炉等の土器も見つかっています。珍しい遺物としては、島屋敷遺跡内では初めての出土となる瀬戸・美濃産燭台や、当遺跡内の他調査区から出土したものと同一個体である酒会壺等があります。また、中世の供養塔である板碑も出土しています。

近世の遺物も陶磁器・土器が主体となりますが、商品経済の発達を反映して、石製品、金属製品、木製品等を含むバラエティに富んだ構成となっていることに特徴があります。陶磁器は瀬戸・美濃産に加え、肥前産、丹波産や堺・明石産の播鉢、志登呂産の徳利や灯火皿、京都・信楽産の碗、淡路珉平（兵庫）産の散蓮華等、器種、産地共に増えます。また、土器は各種の産地が推定できる焙烙や灯火皿が出土しており、石製品ではあきる野市近隣で産出する伊奈石を使用した石臼が目立ちます。金属製品には煙管の部品が多く、喫煙の風習が庶民の間に根付く18世紀以降の製品と考えられていますが、一方、漆器椀や下駄等の木製品は、一部が中世に遡る可能性もあると考えられています。



瀬戸・美濃産燭台胴部破片



舶載酒会壺破片



ここに掲載した写真は、過去10年間に調査した島屋敷遺跡全体の合成写真です。上が北にあたります。

写真中央の道路を挟んで東側の区域が中世の屋敷跡や柴田氏の陣屋があった場所です。現在は団地造成により頂部が削平されて低くなっていますが、元々は上記の道路付近と遺跡東端付近が高い、南に開いた馬蹄形状の丘だったと考えられ

ています。この丘の中央、周囲より一段低かった谷戸状の部分を拡張して、中世の屋敷や近世の陣屋が造られていました。この区域からは他にも陣屋時代の池跡や、戦時中の米軍による爆撃痕、さらには、8世紀代の古代住居跡等が発見されています。

前述の道路から西側はゆるやかな斜面になっていて、段切



り成形された削平地に、丘上の屋敷に付随した集落が営まれていました。そのさらに西側一体は往時の低地部であり、今次調査区はその中に位置しています。遺跡内において最も低く水捌けの悪い場所ですが、この付近にも集落が存在したことを今回の調査で確認しています。

遺跡の北側から東側には蛇行しながら仙川が流れていま

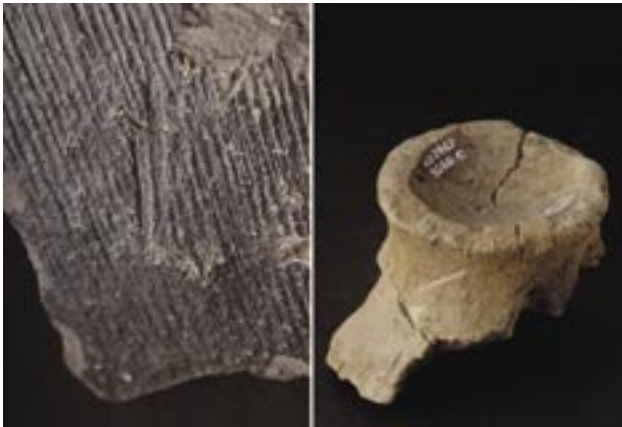
す。写真右下の仙川北岸にある森が島屋敷遺跡との関わりが推定できる天神山城跡、左中央上にある池が仙川の水源の一つで、近年復元された丸池です。また、丸池のすぐ北側、写真端に見える森は勝淵神社で、境内には旗本として当地を治めた柴田勝重が、祖父である柴田勝家の兜を埋めたと伝えられる兜塚があります。



縄文時代の遺物

縄文時代

縄文時代に属する遺物として土器が 87 点、石器 79 点が検出されています。今回の調査では、縄文時代の遺構および遺物包含層の大部分が削平を受けている状況がみられました。遺物のほとんどは後世の水田層から出土しています。縄文土器は、諸磯b式、阿玉台式、勝坂式、加曾利E式、また曾利式の特徴をもつと思われるものを含み、中期が主体となります。石器は、打製石斧、石鏃、敲・磨石、楔形石器、削器、剥片等が出土しています。これらの時期や組成の特徴は、これまでの島屋敷遺跡で確認されている縄文時代のものと概ね共通しています。



須恵器大甕

台付甕底部

古代（古墳～平安時代）

今回の調査では、弥生時代から古代（古墳時代～奈良・平安時代）までに属する遺構はみつかっていません。島屋敷遺跡のこれまでの調査においても、遺跡北西に広がる低地域域では、この時代の遺構は検出されず、遺物だけが散漫に出土しています。

この時代に属する遺物は、26 点が出土しています。遺物の時期は、古墳時代前期、同後期、9 世紀代の、概ね 3 時期に区分されるようです。いずれも破片ですが、古墳時代前期の台付甕や、9 世紀頃とみられる須恵器大甕なども出土しています。またこれらのやや大型の破片は、断面部が激しく摩耗しており、後世に砥石転用されているものとみられます。



水田の畦畔と区画

近・現代の遺構と遺物

元禄 11 年（1698 年）に柴田家が転封になって以降、島屋敷一帯は水田や畠として利用されていました。昭和 10 年代の後半に津村薬草園となっていた島状台地内の一部を除き、昭和 30 年代に新川団地が作られるまで、この土地利用形態が継続しています。今次調査の 1 年前に行われた都営 1 次調査時に引き続き、今回も水田の区画がほぼそのままの状態で見出されました。

この水田の土中からは、明治初頭から昭和 30 年代までの遺物が出土しています。

陶磁器・土器は幕末～明治初頭に作られた瀬戸美濃系や肥前系の製品が出土しています。中でも、見込に星の意匠を施した小坏は、軍隊に関わる遺物と考えられ、当時の世相を反映しています。また、狐の形をした 2 つの製品は稲荷信仰に伴うものと考えられ、現在に連なる民間信仰の一端を示しています。

また、様々な種類のガラスビンも出土しています。戦前の子供たちが飲んだラムネの小さな瓶がある一方で、現在も食卓に上る商品の古い形態のビンもみられます。

プラスチック製品や、金属製品、石製品等も出土しています。このうち、刀の鐔は粗雑な鋳造製品であるため、模造刀の部品と考えられています。また「丹頂」印の歯ブラシも見つっていますが、この製品は当時の「偽ブランド」品らしいことが明らかになっています。



近・現代の遺物